

陶希聖 著
天野元之助 譯

西漢經濟史

生活社刊

昭和十五年五月十八日 印刷

西漢經濟史

昭和十五年五月二十四日 發行

定價 一圓六十錢

譯者 天野元之助

發行者 錢村大二

東京市神田區銀冶町三ノ六鍋町ビル

印刷者 鈴木太郎

東京市四谷區本村町四

印刷所 玄真社印刷所

東京市四谷區本村町四

著者檢印

生活社版

發行所

東京市神田區銀冶町
三ノ六鍋町ビル

株式會社 生活社

振替・東京四三三〇一番

西漢經濟之發達（續）

陶希聖

第二章 西漢初期的經濟

一 漢之成立與農業衰退

貴族（項羽及方國之後）雖起兵企圖保持或恢復舊來的領地，但這是轉趨於貧農與游民無產者（劉邦集團）所不許的。高者的目的在分受貴族的領地，商人資本家（呂田榮）想求獲得政權，以代替抑制商人的秦國。但是土地兼併卻反於農民無產者的要求，在獨占農場及聚積私的墾殖趨勢之前，反農民企圖是必失敗的。以項羽為首領的諸侯王因此消滅，而成功者是農民無產者戰鬥集團的首領劉邦（公元前二〇二年稱帝）。

劉邦不是以貴族之制度而成功。他們是驅却農民，利用游民無產者，以剝削者而欲制度（以下叫做封建制度）代替舊諸侯王制度（即封建領主制）。由地主富農的要求，而不適于貧民個體農業者。

由此而有生產勞動者的政權。分給于分散的獨立農場之上的購買農具肥料的時候，於殘忍貴族的商人之前，彼此之間農民因此沒有組織自己為統治階級的能力。至于游民無產者乃零心。（劉邦不承認人生產作業）是典型的農民代表者。

序

本書は、著者陶希聖君がその手記本を譯者に送られ、譯者の手によつて『經濟史研究』第十四號——二十一號に登載せられたものを、生活社主人の希望により、本庄榮治郎博士の許しを得て、再び「中國歴史叢書」の中に輯録されてゐる『西漢經濟史』（民國二十年八月商務印書館刊）と對照加筆したものである。

譯者所有の手記本は、陶君の筆蹟にかゝるが、之を「歴史叢書」版と對比すれば、第一章（一）中國經濟發達の不均の一節、及び第四章社會改革與農民革命的爆發が全部省略されて居る外、若干字句の出入がある。今は、陶君も上海を去つて居なくなつたので、處々問題になる箇所を尋ねる術も無いから、譯者の判斷に従つて、手記本に缺けたところを補ひ（活字本には、誤字や句讀點の打ち方が違つたりしてゐる）、字句の出入はその妥當なものを採用することにした。

本著は、著者にとつては、其の「愛兒大來君を喪つて後三日目より筆を執り、涙の中に擱筆し、特に其の愛兒を記念する爲に贈られたもの」であり、また譯者にとつては、事志とたがひ上海を去つた彼との暫らくの交友を憶つて、饒けんとするものである。

想ひ起こせば、昨年九月の末、陶君が汪先生と行を俱にして重慶を脱出し、上海の愚園路に來て居ることを知つて、私は友人に手紙を託して、彼に舊交を溫めたいと申し出した。彼は、早速返事を呉れて面會の時刻を知らせて來た。私は約束に従つて赴いたが、生憎く彼は所用のために會へなかつた。其の夜、彼は早速、人に手紙を託して、會へなかつたことを詫び、十月七日か八日の午前十時に來てもらひたいと書いて寄こした。

今度は私が不在で、妻が代つて七日になつてゐる旨の返事をしたが、六日の夜、彼は電話をよこして、明日午前十時御待ちするから來てもらひたいと述べ、それでも満足せなかつたのか、七日の朝早く再び電話をかけて來て、私の來訪を確約させた。

約束に従つて、私は妻と共に愚園路に彼を訪ねた。大きな鐵門はあけられて、自動車は玄關につけられた。昔と全く變らない（たゞ髪の毛を長くのばしてゐた）彼の姿が、玄關口に現はれて、今でも忘れもせぬ彼の第一聲は、僕にはなく、妻に對し「オー、太太！」とよんだのである。應接間に在つての話は、楊小姐の通譯で、主として事變勃發以來の苦惱にみちた彼の一家族の私生活のことであつた。家族を伴つての北京より南京までの逃避行、漢口へ旅立つ前の子供の病氣、南京・漢口・重慶での我が飛行機の爆撃に對する一家の恐怖等々、全く同情せずにはをれなかつた。

數日の後、彼は洋服姿で私の家に回拜^{ハイイ}に來た。その夜、私は無遠慮に、政治生活より講壇生活に早く歸るべきではないかと云つたに對して、彼は、北京に残しておいた稿本『唐代經濟史』數冊が焼かれたことや、多くの資料の散佚したことを以て答へた。實際、私だつて今度の事變に遭遇して、原稿・書籍が焼失したなら、もうこれまで續けた研究はよしてしまはうと、一時考へたことさへあつたのだから、私は全く沈黙した。彼は又、香港から上海に來るに際して、はじめて此の洋服をこしらへ、眼鏡を新たにしたと云ひ、或る日廟に赴いて御籤をひいたところ、「言多ければ凶」と云ふ卦が出たと云つて笑つてゐた。併し、その御籤の凶は、不幸にも彼に適中したのである。新正月の前後に、彼は高宗武君と相携へて、香港へと落ちて往つた。

彼の此の著『西漢經濟史』は、東洋史家の間に、恐らくあきたらぬ點が少なくはなからうが、著者が經濟史

家の立場から、新らしく漢代の社會經濟史を、かく要領よく取り纏めた其の功績は、永く残るであらう。其の後、陳嘯江氏が『西漢社會經濟研究』（新生命書局、民國二十五年）を物したけれども、あまりに公式主義に墮し、馬非百氏は『秦漢經濟史資料』を稿したが、これは又資料的價值しかもたず、私の見るところでは、今日なほ陶君のこれが、支那では異彩を放つてゐる。

以上のことからして、私は再び舊稿を顧ることゝなり、全體に互つて朱筆を加へ、譯註（これは「」で収めた）を生かし、新たに三、四の附録及び「西漢經濟史」に關する日支諸文献を拾ひ上げて、附録として參考に供することゝした。

皇紀二千六百年の佳節に際して

上海にて

天野元之助識

陶希聖著
天野元之助譯

支那に於ける婚姻及び家族史

菊判一八〇頁上製本函入
定價一圓八〇錢_二廿一錢

西漢經濟史 目次

序

—三

第一章 西漢以前の經濟

一

一 支那に於ける經濟發達の不公平

一

二 農業の發達と封建莊園

六

三 封建制度の分解

一三

四 戰國より秦朝まで

一九

五 秦の政治對經濟の反作用

二五

第二章 西漢初期の經濟……………三九

一 漢の成立と商業の衰退……………二九

二 封君制度の實質 附 奴隸制度……………三三

三 商業資本の抑制……………三七

四 此の時期の經濟思想……………四〇

五 集權的企圖と重農思想の展開……………四四

第三章 商業の發達と土地の集中……………四九

一 商業の發達と賤商政策の失敗……………四九

二 手工業・大農場と奴隸制度……………五四

第四章

社會改革と農民革命の爆發

三	高利貸の盛大と土地の集中……………	五七
四	封君階級の衰微……………	五九
五	市場の開拓と財政の集中……………	六四
六	社會に於ける矛盾の爆發……………	七四
七	經今文學派の社會問題に對する無力……………	七七
八	農業技術の改良と常平倉……………	七九
九	土地の集中と商業發達の促進……………	八四
一	革命前夜の社會思想と古文經……………	八八

二 新朝の社會政策.....	九〇
----------------	----

三 階級統治の維持と崩潰.....	九六
-------------------	----

附 表	九九
-----------	----

西漢經濟史文獻目錄.....	一〇七
----------------	-----

第一章 西漢以前の經濟

一 支那に於ける經濟發達の不均

自然は、人類の養育される環境である。人類は、必ず自然に従つて、生活資料を取得して、はじめて生活し得るものである。それ故、人類社會の發達の根基は、人類が生存を求めて、自然との間に闘争することである。此の闘争は、當然、人類を圍繞する自然と密接なる關係をもつ。之に因つて、一國の歴史及びその發達方法を、諒解せんとするには、必ず先づその國の自然條件を明瞭にせねばならぬ。

地球上で最も早く開化した民族は、大抵氣候の比較的溫和な區域に住んでゐたものである。支那は、恰かも溫帶のなかに在る地方である。それ故、支那、とりわけ溫帶のまん中の中部支那には、最も早く開化した民族が居つた。中部支那は、一つの大平原であり、現在の河北・山東・河南・安徽・江蘇・浙江の六省の地域を包含する。其の北部は、白河の流域であり、中部には、黃河が貫流

し、中南部には、淮河が浸潤し、南部は、江・浙の範圍である。此の平原は、海拔六百尺以下である。江・浙平原は、熱帶に近いけれども、海洋の調節があつて、夏季の炎熱も、嚴しくはない。黃河流域の氣候は、溫和であるが、黃海及び東海から運ばれる水分は、北方の朔風の逆撃を受けて、冬春及び初夏には、雨量が極めて少ない。

長江流域には、江・漢平原がある。その海拔の高さは、中原のそれに近い。此の平原は、長江・漢水が浸潤してはゐるけれども、氣候は中原に比して熱く、雨量は非常に多く、古代の人は、此の地域を「低濕」と稱した。

海拔の高さが中原に比してやゝ高いのは、陝西である。此の一帯は、山西と同様、黃河に浸潤せられ、氣候は乾爽してゐて、雨量が少ない。其の西と北とは、甘肅・蒙古高原になり、沙漠に鄰して居り、其の南は、黃河が浸潤して、蔚然たる一大水草區域をなして居る。

長江流域以南は、海拔のやゝ高い山林地帯である。雨量は多いが、氣候は、土地が高いので、長江平原に比して、涼爽である。福建と廣東の沿海にも亦、一帯の平原があり、海に面し山を背にして、江・浙及び中原と特異な點がある。

山脈に就いて云へば、支那の山脈は、大抵東西に横互してゐる。最北には、阿爾泰山脈^{アルタイ}が、沙漠の以北にあり、最南には、岡底斯山脈^{ヒマラヤ}（天山山脈のこと？譯者）と喜馬拉亞山脈^{ヒマラヤ}とが、西藏の南邊に當つ

てゐる。支那内地に延亙せる山脈は、崑崙山脈コンロンであり、其の中脈は、新疆・西藏の間より、陝西を貫いて、江・淮の間に止まつてゐる。其の北脈は、新疆より蒙古を過ぎて東省〔東三省〕に止まつてゐる。其の南脈は、長江以南の各省に散布し、東海と南海の沿岸に盡きてゐる。これらの山脈は、すべて西より東にいたり、東海及び黃海の海岸線と、垂直の關係にあり、南海の海岸線とは平行して居ると云へよう。南嶺即ち崑崙の南脈と海岸との間には、珠江があり、南嶺と北嶺即ち崑崙の中脈との間には、長江があり、北嶺と陰山即ち崑崙の北脈との間には、黃河がある。黑龍江は、陰山系と相交錯して居る。山脈は、西より東へいたり、河流も亦、西より東へ流れて居る。

以上、述べ來たつた自然の形勢より見來たれば、夏・商の文化は、河・淮の間にある平原に發生したことは、怪しむに足りない。游牧生活より定住して來た民族は、當然、此の農業に好適な平原を、家郷とするであらう。甘肅一帯は、水草文化の舊き花園である。周と秦とは、此處より東に向つて侵略した。淮水以南の「低濕」の區は、一大森林及び草木地帯であつた。初めて此處に住んだ民族は、森林經濟の民族であつた。江と海への漁撈生活も亦、淮南の生活であつた。南嶺諸山内には、當然、多數の狩獵民族が住んで居る。

然り而して、人類と自然との關係は、一つの鬭爭の關係である。換言すれば、一つの勞働過程である。人類の自然に對する適應は、能動的適應であつて、其の他の動物の適應とは同一ではない。

動物の爪牙は、完全に自然條件の決定を受けてゐるが、人類の技術は、よく自然環境を改變し得るものである。動物と自然との關係は、不變的（變化は極めて緩慢であり、極めて微小）であるが、人類と自然との關係は、變化的である。古代の農業地帶たる黄河平原は、今日では江・淮に糧食の供給をたよつてゐるし、古來農業の最も早く發達した陝西の高原は、今日では既に「十年九旱」〔十年の間に九年も旱がある〕の地となつてしまつた。

それ故、歴史の基礎は、自然條件ではない。歴史の基礎は、やはり人類の勞働力である。技術の進歩が、勞働力の生産性を増大すれば、社會の經濟構造は、之につれて發達する。

現在、私が本書の中で論述したいと思ふのは、支那の經濟發達の過程に於ける西漢（西紀前二〇六年より西紀八年に至る）一代に相當する一段である。此の一段の經濟發達は、以前及び以後の支那の經濟發達と同様、一つの特徴を有する。その特徴とは、各地の生産組織の相違の點である。支那の經濟發達は、從來不平均なものであつた。斯かる現象の原因は、一部は人類勞働力の自然條件から受けた影響であり、一部は歴史的なものである。

各地の人民の主要な職業が、自然環境の影響を受けたことは當然のことである。蒸氣機關や電氣機械が、大規模に使用されなかつた支那では、斯かる影響は、自ら減少しがたかつた。西南支那の半原始經濟は、今にいたるも存在し、半原始文化の民族は、よつて以て今日まで存在してゐる。西

北及び北部支那の游牧經濟が、現代まで維持されてゐるのは、部落生活の蒙古民族が、現代支那の組成分子をなして居るからである。中原及び長江乃至南方に於ける主要職業は、依然農業である。これは、皆自然環境に依る各地の經濟發達の不公平の實例である。

また、各地の不公平な發達をした職業は、支那では東西に向ふ交通が、阻隔されて居ないので、非常に早く「社會的」分業の現象を發生した。各地の相違した生産物は、非常に早くから、商旅の手を経て相互に交換されてゐた。交換の發達によつて、各地の人民は、夫々各地の自然條件に宜しきところに適應して、特別に彼らの特殊的職業を發展させたのである。特殊な生産技術の發達は、つひに當該地域の自然條件を超越するまでに至つた。即ち古代商業の最初に發達した山東の如きは、西漢以前に特別に進歩した手工技術を有したのである。山東の自然條件は、他處に比して、手工業の發達に宜かつたと云ふ譯ではない。かゝる現象は、歴史的なものである。

斯かる原因よりして、支那の經濟發達は、各地の不公平を以て、特色としてゐる。斯かる特色は、西漢以前には、最も顯著であつた。